

つがる市ブックスタートが始まりました

つがる市読書推進連絡会(松木文子会長)では、今年度から「つがる市ブックスタート」の取り組みを始めました。

この取り組みは、絵本を通して赤ちゃんと保護者が楽しいひとときを分かち合い、子どもたちに本と出会う機会をつくり、生涯にわたって読書を楽しむきっかけをつくることを目的としています。

同連絡会では、10か月健診時に絵本のプレゼントを行うとともに、毎月行われている「子育て広場」において、読み聞かせを行っています。

この日は、市民健康づくりセンターにおいて、10か月健診に訪れた親子13組に、4種の絵本の中から好きなものを1冊ずつプレゼントしました。



親子に絵本をプレゼントする松木会長(写真右)

26年にわたり市民の相談役として



感謝状を手にする佐藤朋子氏(写真左から2人目)

令和3年3月31日をもって行政相談委員を退任された佐藤朋子氏に総務大臣感謝状が贈呈され、この日市役所で伝達式が行われました。

佐藤氏は、平成7年4月に委嘱されて以来、26年もの長きにわたり行政相談委員として、市民と行政の橋渡し役を務められました。任期中は、合計336回の相談所を開設し、市民から行政に対する苦情や要望など2,166件にも及ぶ相談を受け付け、その解決にご尽力いただきました。

倉光市長は「長年にわたり地域住民の身近な相談相手として、地域の方の声を聞いていただき、頭が上がりません。行政相談委員は退任されましたが、これからも一市民として意見ををお願いします」と敬意を述べました。

縄文遺跡ボランティアガイドが魅力を発信

この日、縄文遺跡ボランティアガイド「つがる縄文遺跡案内人」の開始式が行われました。

ボランティアガイドは、11月28日(日)までの土・日・祝日の10時から15時まで、亀ヶ岡石器時代遺跡・田小屋野貝塚の案内や魅力発信を行います。

今年度は、新たにタブレット端末7台と92か国語に対応した翻訳機4台を導入。画像や動画を用いることでより一層縄文の魅力を知りやすくご紹介できるようになりました。ガイドを務める山本薫さんは「自分たちも楽しみながら、来た人にしっかり説明できるようにがんばりたい。相手のニーズに合わせて、会話を通して自分の知識を引き出して説明したい。」と意気込みを聞かせてくれました。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、ガイドを休止する場合があります。



導入したタブレットの操作を確認するガイドら

市消防団が最高位を受賞



4/26 市役所

倉光市長に受賞の報告をする大淵団長（右から4人目）と5地区団長ら

第73回日本消防協会定例表彰で、市消防団が特別表彰「まとい」を受賞し、この日、市消防団を代表して、大淵則昭消防団長と5人の地区団長が市役所を訪れ、倉光市長に受賞の喜びを報告しました。倉光市長は「市として団員を守り、処遇の改善や装備の充実も図っていくので、団員の皆さんには、これからも地区のためにがんばってほしい」と述べました。

この特別表彰「まとい」は、昭和54年度に創設され、全国に約2,200ある消防団の中から、毎年10団体に限り授与されるもので、公益財団法人日本消防協会が行う表彰の中で最高位とされています。

贈られた「まとい」は高さ約2.1メートル、重さ約8キロで、上部は金箔で仕上げられています。準備が整い次第、市役所1階ロビーに展示される予定です。

ウォーキングで家族や仲間たちとの絆を深める

おやこウォークin地球村は、市民の健康づくりや観光拠点の有効活用を目的に毎年開催してきました。

昨年度は新型コロナウイルスの影響により中止となったため、2年ぶりの開催となった今年は、例年行われるお楽しみイベントや抽選会は行わず、新型コロナウイルス感染予防対策を徹底しての開催となりました。当日は、県内各地から家族連れやウォーキング愛好者ら252人が、それぞれ3キロ・6キロ・10キロのコースに参加しました。

この日は、あいにくの雨。それでも参加者は、傘や雨カッパ姿でつがる地球村をスタートし、自然豊かなコースをウォーキングしながら家族や仲間との会話を楽しんでいました。ゴールの頃にはすっかり雨も止み、その笑顔からも家族や仲間たちとの絆が一層深まったように感じられました。

習慣的なウォーキングは、高血圧の改善や心肺機能の強化、肥満の解消などの効果があると言われています。コロナ禍において運動不足になりがちですので、ウォーキングで体も心もリフレッシュしてみませんか。

5/2 つがる地球村



あいにくの雨の中でのスタート



家族や仲間たちと楽しくウォーキング



仲間たちと笑顔でゴール

前市長福島弘芳氏による郷土学習講座

5/9 市立図書館



これまでの政治経験を語る福島氏

NPO法人つがる野文庫の会では、市の歴史・文化・産業・先人などに関する著書や地域づくりに携わる人材を題材に地域文化の創造拡充を目的に、毎月、講師を招いて「郷土学習講座」を開催しています。

この日は、前市長の福島弘芳氏と同会理事の川嶋大史氏が、政治家人生のいろいろと題して対談しました。

福島氏は、公正・公平を信条に政治家として活動してきたことや、農家の所得を上げたいと取り組んだメロンをはじめとした「つがるブランド」の推進、強い思いで進めた教育環境の整備など、これまでのあゆみを語ってくれました。

会場には市民ら40人が訪れ、熱心に話を聞いていました。

3回目は「タカミ」「レノン」の水耕栽培に挑戦!

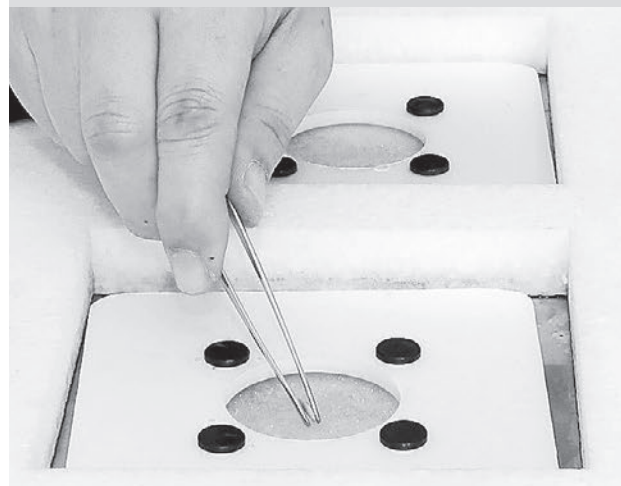
前回、冬場でもメロンの栽培が可能であることを確認した水耕栽培。3回目となる今回は、本市のメロン生産において主力品種である「タカミ」(出荷比率66.8%)と「レノン」(出荷比率16.6%)の水耕栽培にチャレンジします。

メロンの水耕栽培においては、マスクメロンやレノンといった品種での栽培実績は他の地域でも確認できますが、タカミでの栽培実績はあまり聞かれません。

全国有数のメロン産地である本市にとって、タカミは主力品種であり、ぜひ成功させたいところです。

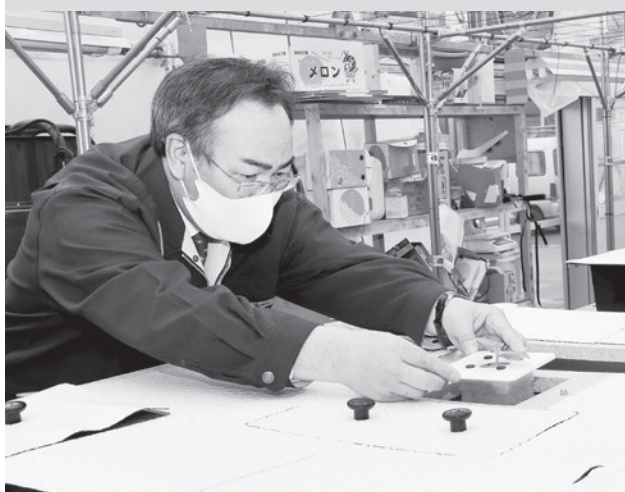
また、今回の実験では、ハウス栽培・露地栽培のものと味の比較も検討しています。

4/27 柏ガラス温室



ピンセットでメロンの種を一粒ずつ播種槽へ

5/11 柏ガラス温室



慎重に苗を栽培槽に定植する倉光市長

レノンを4月27日、タカミを5月2日に、播種槽に種を植え、それから約2日後に発芽。そして5月11日に、苗を播種槽から栽培槽へと定植しました。今回も、安心・安全に配慮した生産技術を確認するため、化学合成農薬は使用しません。順調に生育すると、7月中旬には収穫できる見込みです。

苗を定植した倉光市長は、「主力品種であるタカミの高品質で味の良いメロンを収穫するのが最終目的なので、ものすごく糖度の乗った品質の良いメロンが収穫できることを願っています。」と述べました。

将来的に、水耕栽培が普及されることで、新規就農者の増加や冬場の農家の収入源として期待されます。

田植え後の適切な水管理を呼び掛け

田植えの最盛期が間近となったこの日、稲作農家の生産意欲の高揚を図ろうと、倉光市長はじめ市議会、西北地域県民局、農協関係者らが、市内を巡回して田植え作業中の生産者を督励しました。

この日一行は、柏地区の佐々木浩巳さんと古坂朝和さんの水田を訪問。どちらも順調に作業が進んでいることを確認し、今後の適切な水管理など栽培技術について説明していました。

古坂さんは「安心・安全な米を作って皆さんに届けたい」と話し、倉光市長も「ぜひ自分が納得できる米を作ってほしい」と期待を込めて激励していました。



5/18 柏地区

農家の方々を激励する倉光市長

きれいなつがる市のために一汗

市内各地で春の清掃活動が実施されました。地元企業の従業員や特別支援学校の生徒らが、積極的にまちの環境美化活動を展開しました。きれいなまちづくりは自分たちの手で。

4/16

(株)伊藤鋳業の従業員約40人が、社会奉仕活動として、国道101号線沿い木造から森田までの約4kmの区間をごみ拾いしました。従業員の方は「ゴールデンウィークが近いので、綺麗なつがる市で訪れる人々をお迎えしたい」と話してくれました。



4/26・27

森田養護学校の生徒ら20人が、5月2日(日)に開催された「おやこウォークin地球村」のコースをごみ拾い。おやこウォークの参加者が気持ちよく歩けるよう、丁寧にごみを拾い集めて、イベントの成功を支えていました。



5/8

木造コミュニティ実行委員会(白戸英行会長)が主催し、市金融団なども協力し、朝6時から各町内をごみ拾い。当日は、あいにくの雨がこぼれる不安定な天気でしたが、地域を隅々まで綺麗にしなごら、環境美化への取り組みの意識を高めていました。